

木材・合板博物館

PLY

木と人の素敵な出会いを探る



巻頭インタビュー ■ 第28回

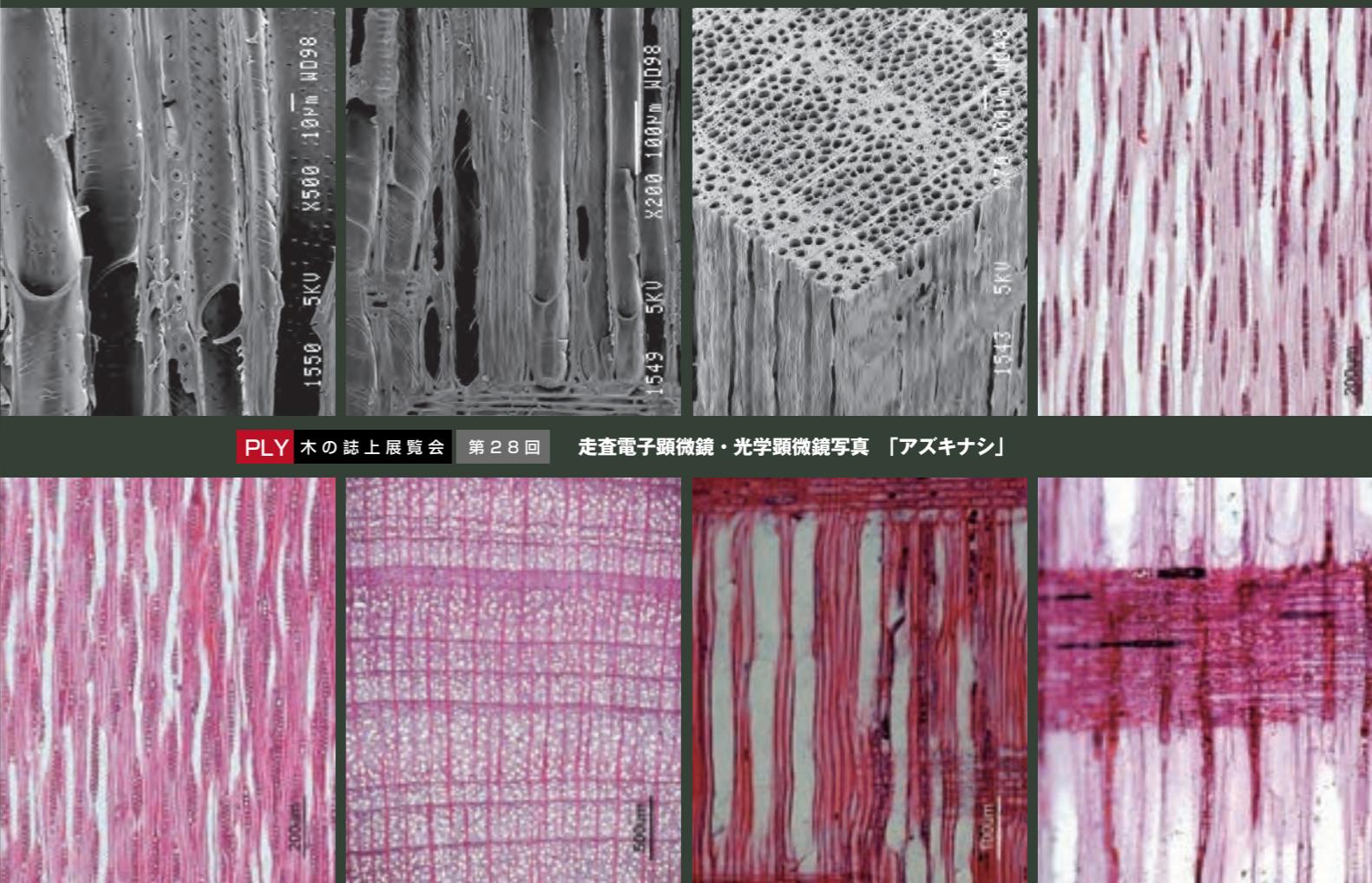
日本式木造住宅が現地職人の手により建築され
ベトナムの町に立ち並ぶ日を夢見て

ライフデザイン・カバヤ株式会社

木アラカルト 16

古代エジプト木工の考察—その1「合板の起源」

武蔵野大学客員研究員・一級建築士事務所クロノス主幹 西本直子



写真提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

バラ科、ナナカマド属の落葉高木。日本では、北海道、本州、四国および九州に広く分布するが、北海道など北方の山地に多い。大きいものでは15メートル以上の高木になるものがある。一般にはあまりなじみがない樹木かもしれないが、ナナカマドの仲間といえば親しみがわくのはなかろうか。木材の心材色は赤褐色で桜の色にも似ており、堅いが材面はなめらかで加工しやすく造作材や器具などに用いられる。

以前にアサダの回(vol.21)でも取り上げたが、過去にはアズキナシなどは雑木として取引されチップにするくらいしか使い道がないとされていたときがある。広葉樹木材資源の枯渇が叫ばれている中、アサダは今では床板材として使われているし、アズキナシも北海道や東北では大事にしていけば将来、利用価値の高い木材が得られる樹木のひとつになると思われる。

話は変わるが、アズキナシの仲間では道管の内壁にらせん肥厚が存在し樹種識別のひとつの指標となる。多くの広葉樹のらせん肥厚では道管の外側から見てS巻(左肩上がり)が多いのだが、この属のらせん肥厚はS巻とZ巻(右肩上がり)の双方が出現するのが特徴である。道管の二次壁は3層【外層(セルロース繊維がS巻)、中層(Z巻)、内層(S巻)】構造であるが、内層の一部が欠落して中層のZ巻が現れてこのような形態になることがわかっている。樹木の遺伝の不思議を見るようで興味深い。なお、走査電子顕微鏡写真では道管内腔のらせん肥厚が多数みられるが、内腔側から見れば右肩上がりがS巻、左肩上がりがZ巻と外側から見た場合と逆になることに注意されたい。

木材・合板博物館 副館長 平川泰彦

PLY(ぶらい)

PLYとは重ねるという意味があり、

WOODを加えるとPLYWOOD(合板)を意味している。

歳月や経験を重ねることの重要性と、

木材が年輪を重ねて成長する姿も重ね合わせている。



日本式木造住宅が現地職人の手により建築され ベトナムの町に立ち並ぶ日を夢見て

藤本 「ライフデザイン・カバヤは建設業として創立して51年になります。カバヤと聞くと、どちらかといふと食品業が目立ち、建設業というイメージはありません。住宅事業は右肩上がりに成長し

長く木造住宅建築に携わってきた企業として、蓄えた知識や技術は必ずやベトナムで活かすことができるとの信念を持ち、令和元(2019)年、ベトナムに現地法人※1を開設しました。海外に住宅産業を興そうと懸命に奮闘する企業の活動内容や現状について伺つてきました。お話を下さったのは岡山県に拠点を置くライフデザイン・カバヤ株式会社開発部でベトナム事業に携わる藤本さんです。

成長戦略のひとつ、ベトナム海外事業

昭和時代の後期、高度経済成長を背景に堅調に伸びた国内の住宅需要は、石油危機により一気に落ち込みました。当時の建設省と通産省は共同で、昭和50(1975)年から昭和55年(1980)年にかけ「ハウス55」プロジェクトを行いました。これは、低価格で優良な住宅を全国に普及させていく、という国家プロジェクトでした。建設業、建材メーカー、ハウスメーカーなど関連企業が技術を持ち寄り、30坪の住宅を50万円台で実現しようとしたのです。落ち込んだ需要を回復し、誰もが住宅持てる時代を実現しようとする国策でした。そして昭和55年、入選した3グループの中の1社として、「小堀住研株式会社」と共に岡山県下での住宅販売を目的に「カバヤ小堀住研株式会社」を設立しています。今回お邪魔したライフデザイン・カバヤ株式会社の前身となる企業です。カバヤ小堀住研は昭和47(1972)年に、「カバヤ食品株式会社」と共に木質系工業規格住宅の認可を受けました。小堀住研は、岡山県下での住宅販売を目的に「カバヤ小堀住研株式会社」を設立しています。今回お邪魔したライフデザイン・カバヤ株式会社の前身となる企業です。カバヤ小堀住研は認可を得た「ハウス55」住宅シリーズを現在に至るまで長く販売していくことになります。

リーマンショックの後、一旦は持ち直したかに見えた国内住宅需要も低調な横這い状態が続き、人口減や少子高齢化でさらなる需要減は避けられない状況です。住宅産業は生き残りをかけ、消費意欲の旺盛な海外市場開拓の必要性に迫られています。ライフデザイン・カバヤ株式会社も

ており、岡山県、広島県の販売棟数では大手に負けず連続でトップ販売をしてきている実績があります。

しかし、ご承知のように住宅需要は右肩上がりで全体の

パイが減っていく中、シェアを伸ばすというのは非常

に困難です。そこで、最近は沖縄や九州、あるいは四国、

山陰、隣の兵庫など、営業エリアを拡げることで棟数

を維持しているのが新築住宅事業の現状です。しかし、

それでは今後生き延びていくのは難しいという判断か

ら、新規に事業展開する構想の一つが海外事業でした。

当初、住宅のCADを使った契約図・申請図などの作成業務を、人件費の安いベトナムで行うことからスタートし、住宅建設業としてベトナムで何ができるか様々な議論をしました。その頃、日本国内では大工さんらの高齢化による後継者問題を抱えていました。住宅事業を主とする企業としては、若い人材を育てなくてはいけません。私共には、社員大工制の仕組みがあり、高校卒業生を社員の大工として育てています。そ

こでベトナムの若い人材を技能実習生として、社員大工と共に日本で大工の仕事を覚えてもらう、職業訓練事業も行うことになりました。これらの目的達成のため、我々の現地法人はハノイ交通運輸大学(UTC)と業務提携し、第一歩を踏み出したのです。



第28回

PLY

卷頭インタビュー

もいので現地で認められた木材の規格、木造建築の基準を作る必要があり、誰でも木造が建てられるような環境づくりをしていかなければなりませんでした。活動の方向性が見えてきたのがここからです。外務省、日本貿易振興機構（JETRO）に木造建築をベトナムに普及させたい思いを持ち掛け、やがては住宅産業に関わる日本企業のためになることを訴えました。

日本とベトナムで建設に携わってきた方を紹介され、その方から一気にベトナム建設省（MOC）、ベトナム建設技術科学所（IBST）のトップとの繋がりができた。2023年はIBST創立60年の記念の年となりました。そこで、施設内の食堂を建替える計画があり、それを木造建築で建替えたらどうかという話が浮上してきました。チャンス到来です。ベトナム政府直轄

・木材について
ベトナムの「家づくり」を考察する



⑥ IBST記念式典
(国際科学会議)
⑦ MOC (ベトナム建設省) にて
⑧ HUCE (ハノイ建設大学) にて
⑨ IBST (ベトナム建設技術科学所) 実験風景



③ 教育期間におけるUTU
(ハノイ交通運輸大学) の建築実習風景
④ ベトナムの技能実習生
(研修中の様子)
⑤ CADセンター事業
(UTU)

5人は、実習終了後に一旦は母国へ帰国することになりますが、日本でも幅広い活躍の場を実習生に提供したいと考えています。大学卒業後の秋から入学し、ベトナムで1年半の教育を経て、その後3年は日本で大工として就労し実践的に学びます。4年目以降は、職人はもとより、現場監督職やベトナムに帰国して起業するなどキャリア選択が可能となります。

技能実習生の国別の内訳はベトナムが一番多い。しかし実習で建設業に就いたベトナム人が、3年、5年の実習を終えて戻った時に、建設業を選択しないことが統計でわかっています。建設業に良い印象を持ってなかつた、「きつい」「厳しい」と感じた事が要因の一つと思われ、改善すべき課題です。もう一つは、学んだ技能を活かせる仕事が祖国の就業先に無いことです。つまり大工仕事がないんです。彼らはあと2年程で帰国することになります。その時、向こうで木造建築を建てる「大工」という職業がある環境をつくるのが我々の仕事です。それまでに、ベトナム国内で木造の魅力や素晴らしさの広報活動に力を入れることが大事ですね。」

オールジャパンで挑む海外市场開拓
—こうしてベトナムに活動拠点を設けたライフデザイナー・カバヤは、様々な「ネクション」を通して、日本の木造住宅の普及・浸透を目指すことになりました。その活動内容には法整備なども含まれることもあり、一企業での事業推進には力不足を感じ、「一般社団法人 日本木造建築海外推進協会（JTOP）※2を立ち上げることになります。

藤本 「日本木造建築海外推進協会を立ち上げたのが2023年3月のことです。ベトナムの住宅産業の確立や海外市場開拓は、製品開発から建設の許認可など多岐にわたり、ひとつの企業の労力ではとても追いつかない。もっと広く業界全体を巻き込み、組織だってやるべきではないかという思いがありました。取引先企業などに戦略や構想を聞いていくと、韓国や中国、台湾などに木造を普及させたいという同じような構想を持つ企業も多かったのです。それでは、皆で組織をつくろうじゃないか、オールジャパンの形で進めているこうという事で意見が一致しました。海外推進協議会のような組織で、ベトナムに限らず広く東南アジアに木造を普及させていこうということです。既にその時、日本木材輸出振興協会の支援事業として、海外

の木造建築の基準や仕組み、市場性を探り日本材の海外輸出を伸ばす活動をしていました。しかし木造建築を建てるという事業がないと、建材としての木材需要はこの先思う様には伸びないと感じていました。やはり木造建築を推進する協議会、団体設立が不可欠でした。

あるという総意から日本木造建築海外推進協会の発足となつたわけです。組織の主な目的は、ベトナムを中心とした東南アジア、中国、韓国、台湾、アメリカと幅広く日本のような住宅産業が活況を呈する世界をつくることです。協会会員には、製材・集成材メーカー、防腐・防蟻処理工場、プレカット工場や金物メーカーなど関係各方面の事業者が集い、この先木造住宅建築事業者を仲間にしていくことで、海外市場で、雇用を生みながら丸太から製材、建材・プレカットまでできる企業などに戦略や構想を聞いていくと、韓国や中国、台湾などに木造を普及させたいという同じような構想を持つ企業も多かったのです。それでは、皆で組織をつくろうじゃないか、オールジャパンの形で進めているこうという事で意見が一致しました。海外推進協議会のような組織で、ベトナムに限らず広く東南アジアに木造を普及させていこうということです。既にその時、日本木材輸出振興協会の支援事業として、海外

の木造建築の基準や仕組み、市場性を探り日本材の海外輸出を伸ばす活動をしていました。しかし木造建築を建てるという事業がないと、建材としての木材需

要はこの先思う様には伸びないと感じていました。やはり木造建築を推進する協議会、団体設立が不可欠でした。

あるという総意から日本木造建築海外推進協会の発足となつたわけです。組織の主な目的は、ベトナムを中心とした東南アジア、中国、韓国、台湾、アメリカと幅広く日本のような住宅産業が活況を呈する世界をつくることです。協会会員には、製材・集成材メーカー、防腐・防蟻処理工場、プレカット工場や金物メーカーなど関係各方面の事業者が集い、この先木造住宅建築事業者を仲間にしていくことで、海外市場で、雇用を生みながら丸太から製材、建材・プレカットまでできる企業などに戦略や構想を聞いていくと、韓国や中国、台湾などに木造を普及させたいという同じような構想を持つ企業も多かったのです。それでは、皆で組織をつくろうじゃないか、オールジャパンの形で進めているこうという事で意見が一致しました。海外推進協議会のような組織で、ベトナムに限らず広く東南アジアに木造を普及させていこうということです。既にその時、日本木材輸出振興協会の支援事業として、海外

の木造建築の基準や仕組み、市場性を探り日本材の海外輸出を伸ばす活動をしていました。しかし木造建築を建てるという事業がないと、建材としての木材需

要はこの先思う様には伸びないと感じていました。やはり木造建築を推進する協議会、団体設立が不可欠でした。

あるという総意から日本木造建築海外推進協会の発足となつたわけです。組織の主な目的は、ベトナムを中心とした東南アジア、中国、韓国、台湾、アメリカと幅広く日本のような住宅産業が活況を呈する世界をつくることです。協会会員には、製材・集成材メーカー、防腐・防蟻処理工場、プレカット工場や金物メーカーなど関係各方面の事業者が集い、この先木造住宅建築事業者を仲間にしていくことで、海外市場で、雇用を生みながら丸太から製材、建材・プレカットまでできる企業などに戦略や構想を聞いていくと、韓国や中国、台湾などに木造を普及させたいという同じような構

想を持つ企業も多かったのです。それでは、皆で組織をつくろうじゃないか、オールジャパンの形で進めているこうという事で意見が一致しました。海外推進協議会のような組織で、ベトナムに限らず広く東南アジアに木造を普及させていこうということです。既にその時、日本木材輸出振興協会の支援事業として、海外

の木造建築の基準や仕組み、市場性を探り日本材の海外輸出を伸ばす活動をしていました。しかし木造建築を建てるという事業がないと、建材としての木材需

要はこの先思う様には伸びないと感じていました。やはり木造建築を推進する協議会、団体設立が不可欠でした。

あるという総意から日本木造建築海外推進協会の発足となつたわけです。組織の主な目的は、ベトナムを中心とした東南アジア、中国、韓国、台湾、アメリカと幅広く日本のような住宅産業が活況を呈する世界をつくることです。協会会員には、製材・集成材メーカー、防腐・防蟻処理工場、プレカット工場や金物メーカーなど関係各方面の事業者が集い、この先木造住宅建築事業者を仲間にしていくことで、海外市場で、雇用を生みながら丸太から製材、建材・プレカットまでできる企業などに戦略や構想を聞いていくと、韓国や中国、台湾などに木造を普及させたいという同じような構

まうと「蒸暑地」ではすぐに腐ってしまいます。そうして「木材は腐る」というイメージが定着してしまったんです。このように木に対する偏見を取り除くことが、日本のスタートでした。もっと時代を遡れば、ベトナムにも日本と同じように木造の建物はたくさんありました。日本の法隆寺とか東大寺のレベルではありませんが、きちんとメンテナンスして今も使われています。現地にはそういう専門職の方もおられて、明らかに百年、二三百年前の寺院などは、日本の寺社改修と同じように、悪くなつた部分の木を取り替えて、また再生するという技術があります。

ベトナムでは木材というと家具の材料です。硬くて重い木から豪華な木彫りの高級家具を製作する一大産業です。ですから日本のように、建材として木材を見る感じはありません。ベトナムでもフランス、カントボルニア国境の辺りで真っすぐ、すっと背が高く伸びる木材もあるということなので、ハノイ建設大学(HUCE)と合同で現地で採れる木材が建築に使えるよう一緒に研究開発をする覚書を交わしています。そうしないとベトナムの国にならないし、地元で暮らす人々の支持も得られないでしょう。また、木造を勉強

普通に受け取られます。やはり大多数の人には手が届く額ではありませんが、将来はこんな家に暮らしたいという夢は与えられたと感じています。現地で建築を

・**防火について**

「木は燃える」というのは万国と同じですが、日本では防火基準、避難基準がありますから、木造というのは安全な建物といわれています。木造だから火災が起きるのはなく、どんな建物にも火災は起こり得る。だから、いかに人の命を守るかという考えに基づき、燃えしろ設計などの手法を使いながら建築していくことを火災にも安全であるという事を伝えています。

・**耐震について**

ベトナムは地震が極端に少ないですが、地震に対する建築基準の考え方があります。時に大きな地震もありますから。しかし、その基準となる地震の外力は日本の10分の1程度です。世界中で日本ほど地震に厳しい基準を持つている国はありません。耐震性に関しては今の日本の建築技術のままで何も問題はありません。

人々が夢見る高級住宅を

ベトナム国内の経済格差は今も大きく、集合住宅に住んでいる大多数人人がベトナムの街に立ち並ぶ日本式の木造住宅に暮らす日は近い。「ベトナムと日本は国民性が似ています。ただ、気候が少し違つついです。日本が木造住宅を発展させてきたように、ベトナムでも木造住宅は受け入れられ、やがて人々は皆が質の良い住宅に住めるようになるでしょう。」というのが藤本さんの言葉です。

藤本 「ベトナムでは大学やIBSTなどで、論文を出す、講演をするなどして、日本の木造建築の長所、木材の長所をアピールすることに力を入れています。展示会に出展するときは、日本の住宅展示場で使うものと同じ住宅パネルを展示しています。すると我々のブースを訪れた人たちに、「ああ、こういう格好良い住宅に住みたい」と言つていただける。価格はどれぐらいですか?との問い合わせに、「1億から1億5千万円です」と答えると、「ああ、分かりました……」と驚くわけでもなく普通に受け取られます。やはり大多数の人には手が届く額ではありませんが、将来はこんな家に暮らしたいという夢は与えられたと感じています。現地で建築を



写真10 IBSTの敷地に建設したカフェテリア

まうと「蒸暑地」ではすぐに腐ってしまいます。そうして「木材は腐る」というイメージが定着してしまったんです。このように木に対する偏見を取り除くことが、日本のスタートでした。もっと時代を遡れば、ベトナムにも日本と同じように木造の建物はたくさんありました。日本の法隆寺とか東大寺のレベルではありませんが、きちんとメンテナンスして今も使われています。現地にはそういう専門職の方もおられて、明らかに百年、二三百年前の寺院などは、日本の寺社改修と同じように、悪くなつた部分の木を取り替えて、また再生するという技術があります。

ベトナムでは木材というと家具の材料です。硬くて重い木から豪華な木彫りの高級家具を製作する一大産業です。ですから日本のように、建材として木材を見る感じはありません。ベトナムでもフランス、カントボルニア国境の辺りで真っすぐ、すっと背が高く伸びる木材もあるということなので、ハノイ建設大学(HUCE)と合同で現地で採れる木材が建築に使えるよう一緒に研究開発をする覚書を交わしています。そうしないとベトナムの国にならないし、地元で暮らす人々の支持も得られないでしょう。また、木造を勉強

する木造建築の学科を設ける計画もあります。こちらにも日本と同じように木造に対する偏見を取り除くことがあります。このように木に対する偏見を取り除くことが、日本のスタートでした。もっと時代を遡れば、ベトナムにも日本と同じように木造の建物はたくさんありました。日本の法隆寺とか東大寺のレベルではありませんが、きちんとメンテナンスして今も使われています。現地にはそういう専門職の方もおられて、明らかに百年、二三百年前の寺院などは、日本の寺社改修と同じように、悪くなつた部分の木を取り替えて、また再生するという技術があります。

・防水について

東南アジアは、暖かくとにかく湿気が多いので、シロアリ等に蝕まれる害は日本の比ではありません。先ほど蒸暑地という話がでましたが、気候の面では日本も厳しい環境の中で、長年培った技術の蓄積があります。びっくりしたのは、向こうの建築には防水という概念が全くないんですよ。雨露や結露を凌ぐ、僕らがいう「雨仕舞い」ですね。日本では雨仕舞いを問題なく建築できるというノウハウを、大工が持っているので、木造住宅だつたら雨漏りしないのは当たり前です。

スコールがきて大雨になると、RCのビルでも天井付近からタラタラと落ちてきます。都市部には超高層ビルもありますし、それらはしつかりした技術、世界標準で作られています。しかし2,500m以下の規模の小さな建物には基準がなく、特に住宅のような低層建築は、本当に勘と経験で建てているようです。日本で屋根を作る場合、勾配を作つて、野地板を貼つて、防水紙を貼つてから屋根材です。ところがベトナムには防水紙がなく、野地板に直接屋根材を施工している事例を見かけます。防水という考え方、技術を持たない施工で雨漏りし、それが巡つて木造の悪い評価につながっています。木造を普及するためには、このような現状に危機感を持ち、基本的な施工方法をIBSTの論文集に入れたり、HUCEでの講演で木造建築の注意点を教えて伝えたりするなど、IBSTの協力を得ながら徹底して行つています。

それと、現地特有の建築形状として、「庇の長さ」があります。軒が深ければ雨もかかりにくく、外壁の傷みも少ない。庇の長さ掛ける4倍ぐらいのところまでは、雨による影響が少ないと言われています。そこでIBSTの木造モデルでは庇を深く出して、雨によつて外壁が傷まないようにしています。ベトナムの方に力を得ながら徹底して行つています。

IBSTの木造モデルでは庇を深く出して、雨によつて外壁が傷まないようにしています。ベトナムの方には、「木造で建築するときは軒を深く作ること」を印

する木造建築の学科を設ける計画もあります。こちらにも日本と同じように木造に対する偏見を取り除くことがあります。このように木に対する偏見を取り除くことが、日本のスタートでした。もっと時代を遡れば、ベトナムにも日本と同じように木造の建物はたくさんありました。日本の法隆寺とか東大寺のレベルではありませんが、きちんとメンテナンスして今も使われています。現地にはそういう専門職の方もおられて、明らかに百年、二三百年前の寺院などは、日本の寺社改修と同じように、悪くなつた部分の木を取り替えて、また再生するという技術があります。

・断熱について

日本の建物は、住宅も含めて省エネルギーの基準があり、設計段階で断熱を考慮しますが、ベトナムには省エネルギーの考え方はありませんが、木造がありませんから木造の省エネ基準はありません。日本と違い暖房はなく、冷房しかありませんので、一年を通して冷房が稼働している前提の断熱を考えなくてはなりません。初めに実験棟として建てた3階建てに断熱材を施工し、2022年の1年間、休まずエアコンを稼働しました。大学の先生方や有識者にお声掛けして、ベトナムに木造建築を建てる場合の断熱をどう考えたらしいか、1年掛けて研究しました。エアコンを使用する室内は湿度が低く、外は90~100%の湿度です。日本はロックウールやグラスウールなど、布団のようなマット状の断熱材を壁に入れます。片面は湿度が通り抜けないよう防湿シートになつていて、日本と同じように使うと外気のほうが湿度が高いことで、冷房による結露が壁の中で起つてしまつことがあります。こ

れ

うに使うと外気のほうが湿度が高いことで、冷房による結露が壁の中で起つてしまつことがあります。このように日本と同じ物を使い同じように施工すれば良いということにはなりません。開発とまではいかなくても工夫が必要で、現地に普及させるために現地にある物を使っていく方法を思案中です。ベトナムは南北に長くひと括りにはできませんが、ハノイはある程度四季があり、ベトナムでも比較的寒い2月頃は10℃台で、4月頃には30℃を越える暑さになります。南方のホーチミンでは、低くとも20~25℃程度はありますからハノイとは環境が違います。建築する都市によって、断熱の仕様を変える必要があります。このようにして決めた断熱基準に基づき建築したのが、前述したIBSTの敷地内に建築した2棟目となる木造モデルです(写真10)。これは「木造モデル公開事業(IBST木造モデルプロジェクト)」として、日越外交関係樹立50周年記念事業※3の認定を受けています。

藤本和典(ふじもとかずのり)
ライフデザイン・カバヤ株式会社
開発部 研究開発課
エグゼクティブマネージャー



ライフデザイン・カバヤ株式会社
本社 〒700-0964
岡山県岡山市北区中仙道二丁目9-11
TEL 086-241-8811

- ・建築工事の請負及び施工に関する事業
- ・上記事業に関するフランチャイズチェーン事業
- ・建築物の設計及び工事監理に関する事業
- ・土木工事の設計、請負、施工及び監理に関する事業
- ・リフォーム及びエクステリア等の設計、請負、施工及び監理に関する事業
- ・不動産の売買及び仲介に関する事業
- ・不動産の管理及びコンサルタントに関する事業
- ・風力・太陽光・地熱の利用等による発電並びに電気・熱の供給に関する事業
- ・清掃事業
- ・警備事業
- ・損害保険代理店事業及び生命保険の募集に関する業務
- ・前各号に付帯関連する一切の事業



写真11 戸建住宅施工例

代の職人も非常に合理的に考えています。それは木工を見ればわかる。しかし科学が未発達な古代の技術の出発点は、私たちと同じではない。そこを丁寧に見ていくと、ベニヤじゃないのか、なんつまらないという事ではなく、発想の違いを知ることになり、そこに木工研究のうえの重要な点があると思っています。大量生産の前提がない点にも面白さがあると思います。

自然の摂理の中で手を動かしながら徹底的に考え抜くことから生まれた発想に光を当てるることは、今の技術を開拓させるヒントになるようにも思われているんです。

美しい木目に込めた思い

——この論文の最後に、西本さんは次のように記しています。

「愛しい子供の遺体を包う6枚の木の層の細工は外から見えるわけでもなく、極上の品がこの世に齎されたとみなすべきであろう。(中略) 第一義に求めたのは強い板ではなく、現世で最も美しい、芳しく優れた樹種をさまざまに集め、来世に向かう子供に手向ける行為そのものであつたと思われる。」※一部抜粋

何も塗装や装飾のない木を美しいと思う心、それは、私が研究している木箱の意匠解説の重要なテーマの一つです。その手掛かりが建築家カーメリト(建築家とその妻)※14にあります。古代エジプト人が主に地中海東沿岸から輸入して重用したレバノンスギは、強く、美しい木目と香りを持ち、カーメリトの箱にも使われて、とても高価であつたことは間違いないありません。色を塗つたものもありますが、塗らずに流麗な木目をそのまま見せた箱があり、中には特別な聖油壺が入れられていました。この箱に

(次号に続く)

※14 8つの宝箱についての詳細は30号に掲載



図4 古代エジプト王朝の年代分布図

PLY 第28号 2024 SPRING

【発行日】 2024年3月15日
【発行】 木材・合板博物館
〒136-8405
東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602
E-mail info@woodmuseum.jp

【発行者】 吉田繁
【編集】 佐藤雅俊(編集長)
PLY編集委員会
【デザイン】 株式会社デジタルアート

編・集・後・記

木材の需要と供給のバランスは、その時期の木材利用と大きく関わっています。過去には、多くの木材が東南アジア地域から南洋材として輸入され、現状では、国産材の需要拡大のために木材製品等の輸出を官民挙げて推進するようになってきました。巻頭言インタビューでは、国産木材を輸出し、それを利用して木造住宅を中心とした建築をベトナムで展開しようとされているライフデザイン・カバヤ(株)のベトナムにおける住宅の試行建築から、公共建築としてのモデル棟試行建築、さらに将来の展開等についてお話を伺いました。木アラカルトでは、古代エジプトにおける木材利用、特にその起源が古代エジプトであると言われている合板について、古代家具木工史研究として新たな重要性を発見された建築家から、考古学研究の諸活動等について、ご紹介を頂きました。(S)

木材・合板博物館のご案内

<https://www.woodmuseum.jp/>

開館時間 10:00~17:00 (最終入館時間16:30)
休館日 月曜日、火曜日、祝日、年末年始
所在地 東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602

入館無料



図3 壁画の解釈を示したウィルキンソンの図 (J. G. Wilkinson, The Manners and Customs of the Ancient Egyptians, 1883年)



写真1 宰相レクミラの墓にある壁画の一部

が、厚さ1ミリの実を4ミリの厚みの中にこしらえた細いスリットに差し込んでいます。この仕業には、根気を通り越して狂氣すら感じます。留継しているのに、外側では突き付け縫をしている、という不合理を先に述べましたが、さらにそれらはすっぽりと金箔で覆われていますから、高価な素材も込み入った仕口も、全く見えないんですね。

私の知るところでは、こうした例は他に見られません。ツタンカーメンの副葬品には薄い黒檀を化粧材として表面に貼った箱があります。象牙と黒檀の組み合わせで、一つひとつとても細かなピースをヘリンボーン模様に貼り付けた見事な意匠もあります。しかしひやを実継したり、直交して重ねた例は、今のところほとんどこれが唯一だと思います。

宰相レクミラの墓の壁画

エジプトではパピルスや墓の壁画に、ヒエログリフという美しい象形文字が書かれています。シャンボリオンがこれを解読したときから、文字はエジプト学を大きく発展させました。研究は文献学や美術史の分野に成果が多く見られ、木工の分析はこれまであまり行われませんでした。

ジョセル王の時代から1200年くらい後の新王国時代の高官であったレクミラのお墓には、接着剤が古代エジプトで使われていたことの根拠となつた壁画があります(写真1)。この墓には幅が2mで奥行きが30mくらいの細長い空間があります。巨大な壁にさまざまな場面が描かれているのですが、その中に、木工房の様子を描いた区画があります。

そして合板に結びつけられて誤解の一元になったシーンがこれです(図3)。1883年、エジプトの生活と習慣について著した本が評判を呼び、一般に広く読まれたのですが、著者のウィルキンソンは、この場面を、職人が膠を溶かして塗つたり、薄板を基材に貼る様子を描いています。しかし、このギャップに気づいたんではいか、と思うんです。しかし、ロエールが先に描かれて、木工房の全てを描き切ろうとする意図が感じられます。

そして合板に結びつけられて誤解の一元になったシーンがこれです(図3)。1883年、エジプトの生活と習慣について著した本が評判を呼び、一般に広く読まれたのですが、著者のウィルキンソンは、この場面を、職人が膠を溶かして塗つたり、薄板を基材に貼る様子を描いています。しかし、このギャップに気づいたんではいか、と思うんです。しかし、ロエールが先に描かれて、木工房の全てを描き切ろうとする意図が感じられます。

このウィルキンソンの記述は、古代エジプトにおける接着剤の存在を広く認知させました。そしてこのことが、ロエールが『合板』の発見を報告したときに、専門家達に現代の合板に欠かせない接着剤の有無を問うことをさせず、その存在をすんなりと受け入れさせる素地となつたのではないかと思います。1942年は世界

で合板の有用性が求められ盛んに作られた頃ですが、この年に出版された「現代の合板(T. D. Perry, Modern Plywood)」に、ウイルキンソンが用いたレクミラの壁画の図を引用して、早くも「古代エジプトでは合板が作られていました」という記述があつたんです。接着剤の有無を調査したキベルは、実はこのギャップに気づいたんではなかろう、つまり「練付加工」のシーンだと説明しました。

このウイルキンソンの記述は、古代エジプトにおける接着剤の存在を広く認知させました。そしてこのことが、ロエールが『合板』の発見を報告したときに、専門家達に現代の合板に欠かせない接着剤の有無を問うことをさせず、その存在をすんなりと受け入れさせる素地となつたのではないかと思います。1942年は世界で大変なニュースになっていたことが想像されます。結局、6種類の違う樹種の板が使われていたという記述は、その後絵から自由に想像して書いてしまったんですね。接着剤の有無を調査したキベルは、実はこのギャップに気づいたんではなかろう、と思うんです。しかし、ロエールが先行してレポートを発表しており、当時、すでに大変なニュースになっていたことが発見される以前の1927年に出版された専門書(E. V. Knight and M. Wulpi, Veneers and Plywood)に、ウイルキンソンが用いたレクミラの壁画の図を引用して、早くも「古代エジプトでは合板が作られていました」という記述があつたんです。接着剤の有無を調査したキベルは、実はこのギャップに気づいたんではなかろう、と思うんです。しかし、ロエールが先行してレポートを発表しており、当時、すでに大変なニュースになっていたことが

驚いたのですが、「合板らしき木片」が発見される以前の1927年に出版された専門書(E. V. Knight and M. Wulpi, Veneers and Plywood)に、ウイルキンソンが用いたレクミラの壁画の図を引用して、早くも「古代エジプトでは合板が作られていました」という記述があつたんです。接着剤の有無を調査したキベルは、実はこのギャップに気づいたんではなかろう、と思うんです。しかし、ロエールが先行してレポートを発表しており、当時、すでに大変なニュースになっていたことが

——この壁画の解釈で古代エジプトの合板の認識を後押ししたと?

で合板の有用性が求められ盛んに作られた頃ですが、この年に出版された「現代の合板(T. D. Perry, Modern Plywood)」

という本に、合板は古代エジプトで既に作

られていました。

PLY VOL.28 2024 SPRING ■ 10